

2012年後期 江戸の本づくり

第12回 〈本〉と〈草〉の構造 本物の世界

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介



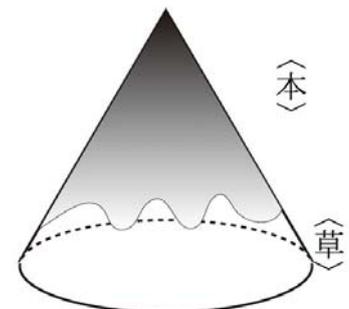
大衆本の広がり 12月20日

物之本と草紙

平安時代から中世前半、唐代までの中国の基本的な装訂である卷子に仕立てて、内容は漢文で書くことが公家や仏家の規範として存在していた。それに対して仮名交じり文からなる物語は、相対的に下位のものであるゆえに、逆に規範性が緩かった。そこから、自由な発想が見られる。卷子でなく冊子にすることなどはその最たるものである。

〈本〉とは本物、^{おおもと}大本という意味である。それに対して〈草〉は格下の存在をあらわす語である。書物についても、知的・古典的内容の書物が〈本〉であり、かなで書かれた文芸書である物語などは、〈草〉の扱いだっただ。したがって草子（草紙）には、正式な卷子に対して格下の書物という意味がある。雑草、根無し草のように一段低いものだった。**今でも草野球、草競馬という。**

この関係は時代を超えてつねに存在し続けてきた。中世には平安の物語が古典として上位に位置づけられる一方、絵巻にみるような新たな見せ方、演劇と深い関係にあった語り物が新しい草紙として下方に生成していく。そのあり方や変化に、日本人の「書物観」があらわれていると思う。



上位にある本は、江戸時代までは物之本とも呼ばれた。草は草紙とか草双紙などと呼ばれて、演劇や戯作などのエンターテインメントを目指した。上下関係がはっきりしていた。物之本は様式や規範性を大事にし、草紙は実質的に話を楽しむようなところが違う。その関係は固定的なものでなく、時代によって変化した。むしろ、〈草〉の側の強い「伸張力」というべきエネルギーによって突き動かされてきたように見える。

この〈本〉と〈草〉の関係は、右図のような三角錐を想起させる。

上に行くほど専門書であり、最下層は混沌とした大衆本というイメージで見てほしい。その境界は曖昧である。時代とともに変化するが、全体が下層に向かって大きくなる。それにつれて境界線が下にいく。

例えば平安時代の物語は当時の三角錐では下部にあったが、中世の間に下が増大し、古典として格上げされていく。**冊子・草紙・草子・双紙と書こうが音は同じ「さうし」で意味も同じである。**

物之本とその広がり

中世までの出版物といえば、漢文体の仏教関係書、漢籍が中心で、かなで書かれた物語はまだ刊行されなかった。それが江戸時代の始まりとともに盛んに本屋から刊行されるようになった。『源氏物語』や『伊勢物語』をはじめとする古典はもちろん、書き下ろし文芸である仮名草子も商業出版として刊行されるようになった。

それでも、すでに述べたように江戸時代の書物で、本屋から出版された商業出版物＝町版はせいぜい3割。本屋を通さず自費で刊行した私家版が3割、数の上では残りの4割が写本だった。本屋の店先には、いわゆる町版の新刊書だけが並んでいるのではなく、私家版も写本もいっしょに置かれていた。すべての本を押し並べて置いておく方針だったのだ。新刊以外の本は古書として仕入れたものだ。顧客から買い入れるのと、古書の市場をとおして入手した。

大きな蔵書家は必ず本に蔵書印を捺した。「不忍文庫」は屋代弘賢の「阿波国文庫」は阿波藩蜂須賀家の印。

このことは、本を収集する者にとっても都合がよかった。江戸時代の読者のうち、〈本〉の側の頂点に立つ人は、本を収集してコレクション化するようになった。当初は大名などの上層武士や儒学者、寺院などであったが、しだいに町人・農民の層まで広がり、身分に関係なく幅広い層に移っていく。

収集と会読

本屋が写本や私家版まで古本として売買したおかげで、より深い収集が可能になった。例えば、塙保己一は目が不自由ながら日本古来の書物の中からすぐれたものを拾い、さらに最善のテキストになるように校訂もおこない、『群書類従』530巻667冊という大叢書を刊行した。保己一は6万巻の書物をつめたという。

その協力者である屋代弘賢（この人も不忍文庫という大蔵書家だった）らとともに何人かが集まって本を読み、解釈しあう会読をもち、その成果を出版に生かした。

大坂でも盛んな商業活動を背景に中井竹山（1730～1804）らが中心となった私塾・懐徳堂で町人が合理的な思想を説くようになっていた。その出身者だった木村兼葭堂（1736～1802）は酒造業で儲けた資金で大収集を行い、その著『日本山海名産図会』では、酒造りの詳細な絵解きをはじめ全国の山海の名産珍味を紹介している。

豊後・日田の漢学者・広瀬淡窓（1782～1856）は金融業の出身で、自ら開いた私塾・咸宜園では身分に関係なく人を集め、明治30年までにのべ4800名の入門者があったという。ここから高野長英・大村益次郎などが生まれている。

このような人物は江戸時代後期になると全国に広がり、かれらの共通点は集めた書籍を弟子や近隣の者に公開し、図書館の役割を果たしたこと、さらに身分差をなくしたことだ。会読のような集団での読書に武士や商人といった区別はなく、学ぶ意志さえあれば誰でも参加できた。

江戸時代の読書は、こうした幅広い層に広がることでさらに伝承力を高めたところに特色があった。

収集された書物は、ふたたび古書として再流通されることにもなった。例えば、曲亭馬琴も収集家として知られるが、晩年手放した。それは必ず次の読者の手にわたる。

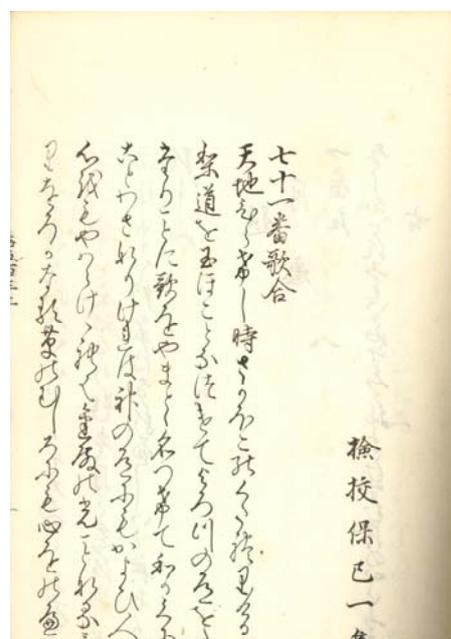
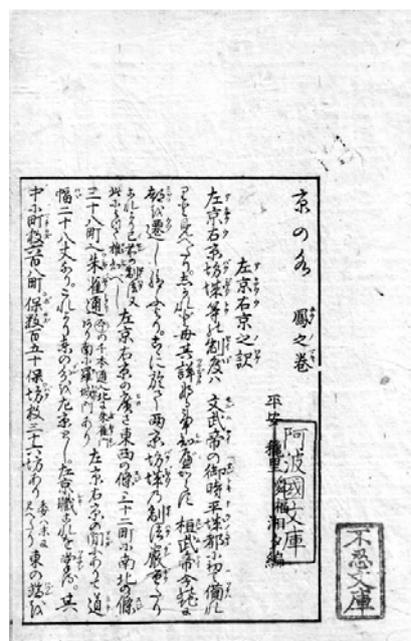
漢詩・狂歌の集まり

集団で文学を論じたり、批評する会も江戸時代後期には盛んになる。漢詩では「詩社」といい、俳諧や狂歌、川柳なども広がった。後者のような集まりを「連」といった。

師匠が添削することで全国的な会になったところもあり、詩社では菊池五山の五山堂が知られる。これは読書さらに創作する能力ある人を地方に広げる効果があった。

そのおかげもあって地方の読書熱も相当に高くなった。貸本屋がないようなところでは、素封家が本を集めて公開し、図書館の役割をはたした。どこの村や町にもそういう人がいたものである。

こうした教育と読書環境のおかげで、俳諧や狂歌を楽しむ仲間である連が発達したり、さらに漢詩文をた



しなむための上級の塾も各地にできた。そのレベルの人は、読むだけでなく書くこともできるようになった。作家の層の厚さも本の隆盛に貢献をしたのだ。

もう一つの本屋、草紙屋

江戸時代の本の層は厚い。それはごく専門的な学術の本から、一般向けの啓蒙書、さらにはエンターテインメントの大衆本まで広がった。その大衆本を担ったのは、三都の仲間に入っていた本屋（書物屋、書林ともいう）とは別の、草紙屋が担った。これを江戸では地本問屋(じほんどいや)といった。

江戸開府から150年たった18世紀中頃以降盛んになる。その代表格に鱗形屋という草紙屋がいた。ここは江戸の先導役として、17世紀末から大衆向けの本を出してきた。演劇（浄瑠璃、後には歌舞伎）と結びついて発展した。安いものだった。表紙の色で、赤本(上図)・黒本などという。

その後様々な地本屋が江戸時代の後期にたくさんのベストセラーを出したのは地本屋のほうである。山東京伝も馬琴もそもそも草紙本の作家である。貸本屋がこれに参画し、読者層を一気に下方へ広げた。

しかし、正規ではないので、その本を全国流通させることができなかつた。そこで次の世代に登場した蔦屋重三郎は、遊里を題材にした読み物である洒落本、吉原のガイドブックというべき「吉原細見」で稼ぎ、黄表紙作家を育てて大衆本界を引っ張り、歌麿・写楽などの浮世絵画家も開拓した。それを全国に売るために書物屋側の本屋仲間にも加入し、その流通網を利用した。これで江戸時代の書物全国流通網ができあがる。

地本屋＝草紙屋の出すものはよく売れたが、それでも本屋（書林、書物屋）の格下扱いのままだった。これはついに江戸時代が終わるまで続いた。始めは町奉行も草紙にはほとんど干渉しなかつた。演劇は上演する前に検閲するので、それをもとに本にするので黙認した。しかし、寛政の改革で厳しくなつた。主として「ぜいたく」を嫌つたのである。そのみせしめとして蔦屋、作者の山東京伝らが罰せられたうえに、新刊を出すたびに許可を得る仕組みができてしまった。

1840年代の天保改革では、本屋も草紙屋も仲間組織が解散させられ厳しい詮議が行われた。そのときに発売禁止処分を受けたのが柳亭種彦の『修紫田舎源氏』である。発行元から回収し、板木を破砕させられた。しかし、この本は今でもいくらでも入手できる。市場に出回つた本は、貸本屋の本までは回収できなかつたのと、改革の嵐が去つた1850年代になると再版したからだ。江戸時代の「検閲」とはこの程度なのである。

草紙屋の活動にはエネルギーが満ちていた。新しいジャンルや作家の発掘などにも挑戦する。それに対して本屋側は守りに傾きがちであつた。しかし、本屋側にも草紙屋のアイデアを取り入れた本を出すようになる。読本(よみほん)というジャンルは、歴史などを題材にしたエンターテインメント性の高い読み物だが、本屋側の出版である。こうした上からと、下からの熱気が江戸時代の後期には非常に高い出版文化を築き上げたのだ。そこに近世日本の特徴がある。

参考文献

揖斐高『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』歴史文化ライブラリー 吉川弘文館
前田勉『江戸の読書会 会読の思想史』平凡社



寛政五年刊の黄表紙『堪忍袋緒×善玉』に出てくる
山東京伝と蔦屋夫妻。